



# 木 木

千葉県 TEACCH プログラム研究会  
2017年7月9日(日) 第90号

「森」字・佐々木正美  
イラスト・竹蓋伸六

発行：千葉県 TEACCH プログラム研究会広報部

ホームページ：<http://www5e.biglobe.ne.jp/~teacch/site17.htm> 事務局：千葉県発達障害者支援センターCAS 内 TEL:043-227-8557



## 自閉症スペクトラムの人への支援

～合理的配慮としての補助代替コミュニケーション～

京都市児童福祉センター 門真一郎 氏

2017年度第1回セミナーの今回は、京都市より、TEACCHやPECSの伝道師として著名な門先生をお招きして、お話をうかがうことができました。

「自閉症スペクトラムの人へ支援しようというときに、コミュニケーションがとれないと有効な支援ができない。だから、コミュニケーション支援は基本中の基本である」とお考えの門先生。たくさんの実例を映像でご紹介いただきながら、コミュニケーション支援について教えてくださいました。

コミュニケーションには、「理解」と「表出」の2つがあり、両方を支援してはじめて、「コミュニケーション支援をした」と言える…とのことでした。

### 理解のコミュニケーション とは…

- ・本人にとっては「理解」であり、支援する側からどう伝えるかということ。
- ・意味と見通しが視覚的に伝えられていることは、誰にとっても必要だが、メリ(苦手なこと)である話し言葉で伝えても明確にならない自閉症スペクトラムの人に対しては、ハリ(強み)である視覚を生かした「視覚的構造化」(場面の「意味」と「見通し」を明確にすること)が欠かせない。
- ・場所の構造化(目的別にコーナーを設定したり、余計な物が見えないようにしたりする。)
- ・時間の視覚的構造化  
…「活動間スケジュール」(1日の予定等、どんな活動がどんな順序でこれからあるのか。)  
…「活動内スケジュール」(手順書やTEACCHプログラムのワークアクティビティーシステム等。)
- ・年齢相応なものに形態を変えて、一生使う。目指すのは、スケジュールを自分で作るなど、時間の自己管理。

### 表出のコミュニケーション とは…

- ・本人が支援する人に伝えるということ。
- ・自発することが大事。(自分がどんなに困っていてもヘルプが出せなかったり、聞かれるとはじめて伝えたりという、プロンプト(手助け)依存は、将来の自立とは正反対に進んでしまう。プロンプトを早期に除いていくことができる教え方が有効。)
- ・対人接近(伝えたい人の近くに行く)ができることが重要。(支援者が離れているのに、その場で言い続けても、独言になってしまう。)
- ・「要求」から教えることは、自閉症スペクトラムの人にとっては、要求したものが手に入ることから、自発的に伝えることが身に着きやすい。
- \* AAC(話し言葉の代わりとなるコミュニケーション手段)は、日常生活で使えるべきであるとのことで、PECS(Picture Exchange Communication System)の活用を、実践例としてご紹介いただきました。



Q：言語でやりとりすることへのこだわりがある成人の方に、  
どうしたら視覚的情報に興味をもってもらえますか？

A：言語のみのコミュニケーションで、それが上手く理解できなかったから、結果的に、こだわっているように見えているのではないのでしょうか。本人のやりたいことや、欲しいものをアセスメントして、それを使ったスケジュールやPECSのトレーニングをすることが大切。「強化子ファースト」です。支援者側がやらせたいことではなく、本人にとってプラスになるスケジュールを使っていきたいですね。



Q：「ゆっくり」とか「落ち着いて」を視覚的に伝える方法があれば教えてください。

A：何が「ゆっくり」なのか、具体的に何の活動で、どんなスピードが「ゆっくり」なのか、それを視覚的に伝える工夫が必要だと思います。「落ち着いて」についても、落ち着くためにどうするか、「3回深呼吸をする」とか「カームダウンエリアに行く」とか、具体的な行動を伝えることが大事です。



Q：小3の28人学級の中に1人、自閉症スペクトラムと診断された児童がいます。合理的配慮を望む保護者に対して、他の仕事との兼ね合いもあり、やりきれないという思いが強いです。

A：合理的配慮について、学校全体で取り組むべきです。（幼稚園で作成したスケジュールを画像でご紹介いただきました。）これまで経験がないことを最初に取り組むときは、たいへんでも、軌道に乗ったら、実は以前よりもっと楽になる。視覚的支援がないクラスの自閉症スペクトラムの子が、問題行動を頻発させてひどくなったり、パニックを起こしたりするようになるかもしれない。それからだともっとたいへん。思い立ったが吉日です。



（T研スタッフより）千葉県では、特別支援学校のコーディネーターや、巡回指導員がいるので、一緒に取り組んでみてはどうでしょうか。クラスの中で1人のための支援ではなくて、例えば、黒板に予定を書くだけでも「その子が分かりやすくすることで、みんなもわかりやすくなる」という考え方で取り組んでみてはいかがでしょうか。



自閉症スペクトラムの子にとって役に立つことが、他の子にも役に立つということは、たくさんあります。一般的な発達の人たちでも、80%が視覚優位ですから。



Q：多職種の方とも、自閉症スペクトラムについて共通の理解を広めるには、どのように勉強していけばよいのでしょうか？

A：同じ職場であれば、勉強会を呼びかけるのは、1つだと思います。TEACCHプログラム研究会で学ぶことも、最初のスタートとして大きな学びの場です。1人ではなく、同好の士を募って、職場で実践したことを伝えていくことが大切ではないでしょうか。動画や画像をフルに使って、視覚的に広めていくのが有効だと思います。





# 『インフォーマルアセスメント』講習会

講師 特定非営利活動法人自閉症eサービス理事長 中山 清司 氏

6月25日(日)に行われた講習会では、「自閉症の人がいればすぐできる！現場ですぐ使える！インフォーマルアセスメント」について中山先生に教わりました。

## 評価に基づいた支援方法を提供すること！

自閉症の人は、自分から教えてくれないことが多いので、評価（アセスメント）は積極的に行う必要がある。こちらから仕掛けていくことが大切。支援者は、自閉症の人その人がどんな面があり、どんな力を持っているのか具体的に評価した上でチームで評価をすりあわせていくことが重要。

## 評価は可能性に注目すること！

問題行動やできないことばかりに注目することは、コストがかかり、失敗経験を増やすことにつながる。ポジティブに本人の現状を確認し、理解の仕方はどうか、わかっているやらないのか、わからないのか、意味がわからないのか、技術（スキル）的にできないのかなど評価をしていく。そして、できそうなことにターゲットを絞って支援方法を提供していく。

## 評価に基づくとは

様々な場面での評価を行う時に、本人の力でどのくらいできるかを見る。ポイントとしては、答えや方法を教えないこと。学習態度や理解の度合い、表現の仕方などを具体的に評価していく。その後、どこまで手伝ってできるか、どんなことで理解が促せるかのヒントを探っていくことが自閉症の人その人にどう関わった方が良いのかを明確にする第一歩と言える。

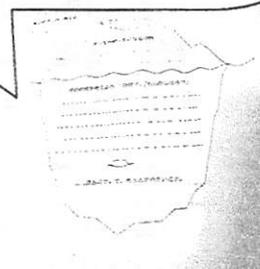
## 支援を失敗しないためのPLAN（計画立案）-DO（支援の実施）-SEE（見直し）

うまく支援ができていない時は、評価をやっていないこと、無理な目標設定をしていること、具体的な方法が明確でないこと、計画を見直ししていないことなどがあげられる。思い込みで関わることを減らすために常に評価をしながらPLAN-DO-SEEを繰り返すことがよりよい支援で大切。（文責：吉村）

映像から評価をして具体的な支援方法を各グループで話し合い、全体で共有しました。

評価の演習シート  
観察記録、支援のアイデア・工夫、まとめ、支援プランなどを話し合いました。

冰山モデルから考える困った行動や気になる行動の背景や〇〇さんについてもっと知りたいことをシートにまとめました。



## 「インフォーマルアセスメント」参加者の声



今回は、Eグループの皆さんの感想をご紹介します。

- Aさん：講師の話だけでなく、評価を映像などから確認し、話し合うことができて良かった。
- Bさん：きちんと評価できていなかったことに気づいた。今後はチームで話し合っけて評価していきたい。
- Cさん：事例をだし、いろいろな人の意見が聞けて良かった。
- Dさん：映像を見ての評価では、自分以外の方がすごくよくいろいろなことに気づいていることに驚いた。ケース会議の方法もわかったし、今後やっていきたい。日常でこまめに評価をすることは、時間と人手が必要で実際には大変と感じる。でもやりたいと感じた。
- Eさん：私にとって勉強になった。映像もあり、良かった。支援学校の支援員だが、できたら専門家にアドバイスを受けながら実践したい。今日みたいな仲間がいるといいですねー。

## ティータイム ム

皆さまに大変悲しいご報告をさせていただきます。私たち千葉県 TEACCH プログラム研究会（以下T研）を準備段階から支えて下さっていた佐々木正美先生が、先月6月28日にご病気によりご逝去されました。81歳でした。2002年12月「千葉県にもT研を！」と大屋会長はじめ私たちスタッフの強い願いにより、先生はご講演に駆けつけてくださいました。

2004年にT研設立以後、私たちは、毎年、年度初めの総会後に先生のお話を聞くことから研究会を始められることを心から幸せに思っていました。大変残念です。

先生は、著名な児童精神科医ですが、日本にTEACCHプログラムをご紹介下さった日本TEACCHの父であり、自閉症関係の他、こどもの発達や子育てに関する著書も多く、先生ほど全国の家族、支援者、先生方など職業によらず信頼され慕われ愛されていた児童精神科医はかつていらっしゃらなかったのでは？今後いらっしゃるのだろうか？と思います。

私個人にとりまして、先生は仕事上の父のような存在であり、先生がいらっしゃらなかったら、研究会で皆さまとお目にかかったり協働したりすることもなかったと思います。今回の講演者である諏訪先生とは、朝日新聞厚生文化事業団のTEACCH部留学生の同級生ですが、佐々木先生が試験官で、その日が本格的にTEACCHを学ぶスタートになりました。

心から先生に感謝を申し上げ、謹んで御冥福をお祈り致します。次回の広報では、追悼の特集を掲載させていただきたいと思います。

千葉県 TEACCH プログラム研究会 スーパーヴァイザー  
安倍 陽子

### 平成29年度 TEACCH プログラム研究会 第3回連続セミナーのお知らせ

日時 9月30日(土) 13:30~16:30

内容 「学齢期の支援:教育現場での視覚支援の取り組み」(課題)

講師 高尾 政代氏(久里浜特別支援学校 教諭)

会場 千葉商工会議所第1ホール



(編集後記) 今年の5月の連休は、TTAP研修会に参加してきました。講師からの新しい情報を沢山学ぶことができました。今回のインフォーマルアセスメントの講習会と同じようにいかにその人の情報を多く得て精査していくかが支援のポイントでした。そして一緒に学ぶ受講生の皆さんに刺激を受け、気持ちを新たに日々の支援を頑張ろうと思いました。共に学ぶことって大切ですね。皆さん、これからも一緒に学び続けましょ!! (吉村)